様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１０日現在

機関番号：３４１０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０２５４
研究課題名（和文）　古写経識語による古代文字史料研究

研究課題名（英文）　Research into ancient Japan’s written historical documentation with the use of the transcriptions of Early Sutras.

研究代表者　遠藤　慶太（ENDO KEITA）
皇學館大学史料編纂所・准教授
研究者番号：90410927

研究成果の概要（和文）：
図版などを収集したことにより古代写経の識語の本文を確定させた。この確定本文を基礎にして日本史学・日本文学・日本語学・仏教学の協同作業によって注釈作業を進め、識語にこめられていた祈願内容を抽出することができた。また識語のなかで特に重要と思われるものは注釈内容を学術雑誌において公表した。
これにより信頼できる識語本文の集成が完成し、写経識語を新たな歴史資料として活用する基礎的条件を整えることができた。写経の識語が古代の社会・信仰を考えるうえで有益な情報を含んだ文字史料である。今後はさらに敦煌写経など同時代の中国における事例との比較なども視野に入れ、研究の展開が期待できる。

研究成果の概要（英文）：
Transcriptions of Early Sutras were identified with the use of images.
Work then proceeded onto interpreting these sutras in a joint project involving the fields of Japanese history, Japanese literature, Japanese language and Buddhism.
The most important of these interpretations were published in academic magazines.
This has enabled the acquisition of the fundamental conditions for using these as new historical records.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史、古代史

キーワード：古代文字史料、写経、仏教信仰

１．研究開始当初の背景

戦後の日本古代史研究では編纂された史書（二次資料）の歴史観を相対化するものとして、金石文や木簡といった一次資料の研究が進展した。考古学と文献史学の協同研究によって、現在では文字の書かれたモノとしての特性がひろく認知されるにいたった。また東アジアの規模での比較も重ねられることにより、木簡は奈良時代の文字史料として確たる位置づけを得ている。

ところが同じ古代の一次資料といっても、写経に書かれた紀年・人名・願文といった文字情報に関しては、書道史・美術史の分野を除いてあまり注意がはらわれてこなかった。仏教テキストを書記した「写経」という素材に対し、古代史の側で史料学的関心が乏しい面があっただろう。

しかし最近は正倉院文書の多面的な研究が展開され、奈良時代の王権中枢と密接につながる「写本工房」とでも呼ぶべき写経機関の活動が明らかになってきた。そこで写されたテキスト（写経）と写される過程（正倉院文書）を橋渡すものとして、写経の銘文は史料研究の上で不可欠の存在である。

そこで古代写経に書かれた文字情報を「識語」と総称し、新たな古代史の文字史料としてその意味を定置し、古代史を豊かに描き出すための史料としての可能性を引き出すことを意図した。

２．研究の目的

古写経の識語は八世紀の肉筆として、それ自体が貴重な一次資料である。木簡などの出土文字史料と比べると、識語は写経というモノに従属した特殊性もあって古代史研究では積極的に活用されてこなかったきらいがある。

そこで進展する木簡・正倉院文書の研究を援用して写経そのものに検討を加えることにより、人名や地名はもとより、仏教による信仰を願文の形式で表明した古写経の識語が有する仏典であるがゆえの特殊性・文字史料であることの普遍性を把握し、新たな古代文字史料に参入させることを目的とする。

３．研究の方法

先行する研究では古代写経の識語を活字版で翻刻して紹介したものが多く、研究者によって識語の本文そのもので字句の相違が存在する。また翻刻はあっても訓読・注釈はなされていないため、意味内容の理解が十分でなかったといえる。

そこでまず信頼すべき本文の確定を最優先に掲げ、奈良時代写経の識語すべてを対象として写経の写真画像を収集、画像をもとに翻刻を行った。

識語は難解な漢文構造・仏教語が多いので、日本史学の分野にとどまらない研究者の知見が必要であり、確定した本文にもとづいて訓点を施すことが不可欠である。そのため日本史学・日本文学・日本語学・仏教学の分野から写経識語に関心をもつ研究者に参加を要請し、協同による識語の注釈作業を進めるための研究会を組織した。研究会は園田学園女子大学を会場として毎月一回程度開催し、奈良国立博物館編『奈良朝識語』の図版をベースとした。

加えて各地の博物館で所蔵される古写経の観察を行い、図版だけでは知り得ない墨色・字体の相違についてデータを収集した。

４．研究成果

（１）古代史史料としての写経識語の提示

研究会での討議を経て、奈良時代写経の識語ほぼ全点にわたる本文の確定・注釈作業が完了した。おもな識語については続日本紀研究会（大阪歴史学会古代支部会）が刊行する学術誌『続日本紀研究』において連載の機会を得、作業成果の公表を開始した。

写経の識語が古代の社会・信仰を考えるうえで有益な情報を含んだ文字史料であり、新しい歴史資料として活用する基礎的条件を整えることができた。今後は連載した識語注釈をまとめ、語句索引および写経に関する論考を加えて一書として刊行すべく、編集作業を続けている。

（２）識語を通じた仏教受容の比較検討
　注釈作業を通して明確になった識語内容からは、漢籍や仏典の語句を駆使して記念性の高い文章が構成されていることが指摘でき、先行する願文類（『文選』や『広弘明集』所収の作品など）を参照した可能性が高い。この点は八世紀における仏教受容を一次資料である写経を通じて具体的に解明したものと評価でき、さらに敦煌写経など同時代の中国における事例との比較なども視野に入れた研究の展開が期待できる。

（３）識語に見る仏教信仰の解明
　注釈を通して「知識」（結縁した信仰集団が財物・労力を拠出して仏典の書写や仏像・寺院の造営などの諸事業を行うこと）による写経の実例を多く抽出することができた。東大寺の大仏造営や行基の社会事業と同様、当時の社会において「知識」が定着し、写経がその手段とされていたことが確認できた。
　「知識」写経のなかには「天朝」「聖朝」など天皇の安穏を祈願した文言がみられ、写経は肉親や一切衆生への功徳だけではなく、当時の社会秩序を安定させる目的があったことも指摘できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
①遠藤慶太「天平勝宝六年家原邑知識経の識語について」、皇學館大学史料編纂所所報『史料』228、査読無、2010、pp. 1-9
②遠藤慶太「入唐僧貞恵と藤原鎌足―『家伝』と「日本世記」との接点―」、篠川賢・増尾伸一郎編『藤氏家伝を読む』、吉川弘文館、査読無、2010、pp. 39-58
③遠藤慶太「上代写経識語注釈（その五）仏説七知経（聖武天皇勅願一切経）」、続日本紀研究会『続日本紀研究』389、査読有、2010、pp. 33-43
④遠藤慶太「『家伝』『懐風藻』の典拠のこと」、日本歴史学会『日本歴史』759、査読有、2011、pp. 95-96
⑤遠藤慶太「欽明紀における漢籍典拠―侯景の乱を通して―」新川登亀男・早川万年編『史料としての『日本書紀』　津田左右吉を読みなおす』、勉誠出版、査読無、2011、pp. 193-219
⑥遠藤慶太「書評　鹿内浩胤著『日本古代典籍史料の研究』、大阪歴史学会『ヒストリア』228 、査読有、pp. 104-110
⑦遠藤慶太「『日本書紀』と加耶の城」、吉川弘文館『本郷』101、査読無、2012、pp. 22-24
⑧遠藤慶太「『経国集』対策の新羅観―天平宝字元年紀真象対策より―」皇學館大学史料編纂所所報『史料』236、査読無、2012、pp. 1-7
⑨遠藤慶太「議政官とヒメマチキミ―尚侍からみた藤原仲麻呂政権―」、史聚会『史聚』45、査読無、2012、pp. 20-30

〔学会発表〕（計２件）
①遠藤慶太「石川年足の墓誌と願経」、大阪市立大学都市文化研究センター　ドクター研究員プロジェクト「日本古代墓誌の再検討」、2011 年 1 月 29 日、大阪市立大学
②遠藤慶太「木簡の歌と歌語り」、第９回万葉古代学共同研究公開シンポジウム「声から文字へ木簡に記された詩歌と古代東アジアの詩歌の場―」、2012 年 9 月 29 日、奈良県立万葉文化館

〔図書〕（計１件）
遠藤慶太『東アジアの日本書紀　歴史書の誕生』、吉川弘文館、2012、208

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　慶太（ENDO　KEITA）
皇學館大学史料編纂所・准教授
研究者番号：90410927

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：